

熊取町埋蔵文化財調査報告第22集

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・VIII

1994年 3月

熊取町教育委員会

は　し　が　き

旧石器の時代にさかのぼるはるか昔より人々がこの大地に根をおろし、現在に至るまで脈々と子孫を繁栄させ、土地を開墾し、産業を興しながら文化を向上させてきました。文化財とはまさにそういう先人達が現在の私たちに残した貴重な文化遺産であります。この貴重な文化財の一つに埋蔵文化財があります。埋蔵文化財とは読んで字のごとく土に埋もれている文化財であります。発掘されない限りあまり日の目をみない文化財ではありますが、古文書などではわからないような先人達の生活をじかに知ることができるには埋蔵文化財だけといつても過言ではありません。

しかしながらこの埋蔵文化財は近年の急速な土地開発等により全国的な規模で破壊・消滅の危機にあります。本町におきましても現在38ヶ所の埋蔵文化財の包蔵地、いわゆる遺跡が確認されておりますが、増加する土地開発により年々遺跡の破壊・消滅が進んでおります。

このような状勢の中で、本町教育委員会では破壊されてゆく遺跡の記録・保存を行うために、土地所有者をはじめ関係者各位のご理解とご協力を得て発掘調査等を実施してまいりました。本書は平成5年度中に国庫補助を受けて実施した発掘調査成果を概要報告書としてまとめたものであります。いずれも小規模な調査で、十分な成果を挙げ得たとは言えませんが、熊取町ひいては泉南地域の文化解明のための一資料として広くご利用いただければ幸いです。

末筆になりましたが、現地での発掘調査にあたってご理解とご協力をいただきました土地所有者ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げますとともに、より一層のご理解・ご協力をお願い申し上げます。

平成6年3月

熊取町教育委員会

教育長 七里 弘

例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会が平成5年度国庫補助事業として計画し、町史編さん室が実施した熊取町遺跡群発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会町史編さん室 阿部 真、前川 淳を担当者とし、平成5年4月1日に着手し、平成6年3月31日をもって終了した。
3. 本書は、報告書作成の都合上、前年度にあたる平成5年3月から平成6年2月末までの発掘調査成果を掲載することとした。
4. 本書の作成にあたって、武内雅人、西口陽一、前田敬彦の諸氏から有益な御教示を頂いた。記して感謝の意を表する次第である。
5. 本書における図面の方位は、地図以外について磁北を示すこととした。
6. 本書における図面の十色は、必要に応じて、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』第10版（農林水産省農林技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修 1990年度版）を援用した。
7. 本書の編集は阿部が行い、執筆は文末に示す各担当者が行った。

目 次

はしがき

例 言

第1章 はじめに	1
第2章 地理的・歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	6
第1節 東円寺跡の調査	6
1. 92-11区の調査	8
2. 93-1区の調査	10
3. 93-3区の調査	11
4. 93-4区の調査	16
5. 93-6区の調査	17
第2節 大浦中世墓地の調査	19
93-1区の調査	20
第3節 久保城跡の調査	21
1. 93-1区の調査	21
2. 93-2区の調査	23
第4章 おわりに	25

挿 図 目 次

- 第1図 熊取町の位置
第2図 熊取町内遺跡分布図
第3図 東円寺跡 調査区位置図
第4図 東円寺跡92-11区 調査区設定図
第5図 東円寺跡92-11区 調査区1 平面・断面図
第6図 東円寺跡92-11区 調査区2 平面・断面図
第7図 東円寺跡93-1区 調査区設定図
第8図 東円寺跡93-1区 東壁断面図
第9図 東円寺跡93-3区 調査区設定図
第10図 東円寺跡93-3区 第1遺構面・断面図
第11図 東円寺跡93-3区 第2遺構面
第12図 東円寺跡93-3区 遺構断面図
第13図 東円寺跡93-3区 出土遺物1
第14図 東円寺跡93-3区 出土遺物2
第15図 東円寺跡93-4区 調査区設定図
第16図 東円寺跡93-4区 調査区2 平面・西壁断面図
第17図 東円寺跡93-6区 調査区設定図
第18図 東円寺跡93-6区 平面図
第19図 東円寺跡93-6区 西壁断面図
第20図 東円寺跡93-6区 出土遺物
第21図 大浦中世墓地 調査区位置図
第22図 大浦中世墓地93-1区 調査区設定図
第23図 大浦中世墓地93-1区 南壁断面図
第24図 久保城跡 調査区位置図
第25図 久保城跡93-1区 調査区設定図
第26図 久保城跡93-1区 調査区1 東壁断面図
第27図 久保城跡93-2区 調査区設定図
第28図 久保城跡93-2区 調査区1・2 断面図

図 版 目 次

- 図版第一 東円寺跡92-11区
- 図版第二 東円寺跡93-1区
- 図版第三 東円寺跡93-3区
- 図版第四 東円寺跡93-3区
- 図版第五 東円寺跡93-3区 出土遺物
- 図版第六 東円寺跡93-4区
- 図版第七 東円寺跡93-6区
- 図版第八 大浦中世墓地93-1区
- 図版第九 久保城跡93-1区
- 図版第十 久保城跡93-2区

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・VIII

第1章 はじめに

平成5年度における文化財保護法に基づく土木工事等による埋蔵文化財の発掘調査届出件数（平成6年2月末日現在）は27件であり、昨年度の同じ時期（22件）と比較して若干の増加を示している。その内訳は、ガス・上下水道・電気工事等9件、個人住宅建設8件、公共施設建設4件、道路整備2件、店舗・事務所建設3件、その他1件となっている。また、遺跡別に見ると、東円寺跡における届出が14件と全体の約5割を占めており、次いで大久保B遺跡が3件、久保城跡・大谷池遺跡が各2件、中家住宅・雨山城跡・大浦中世墓地・祭礼御旅所跡・大久保E遺跡が各1件、溜め池が1件という状況となっている。

以上のような状況の下で、2月末現在までに本町教育委員会では、発掘調査を13件、立会調査を12件、慎重工事1件を実施・指導している。その内訳は、発掘調査については国庫補助対象事業が7件、民間事業が2件、公共事業が4件となっており、立会調査については民間事業が1件、公共事業が11件となっている。

本書では、平成5年度国庫補助事業として実施した東円寺跡4件、大浦中世墓地1件、久保城跡2件、および平成4年度事業の未報告分である東円寺跡1件（東円寺跡92-11区）を合わせた8件の発掘調査成果について概要を報告する。

(阿部)



第1図 熊取町の位置

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

熊取町は大阪府泉南地域のほぼ中央部に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと、南北に長い木の葉形を呈している。町域の総面積は約17平方kmを有する（第1図）。

地形による面積比をみると、山地が41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。地域別にみると、町南部においては泉南地域の基本山地となる和泉山地が大部分を占めており、北部においては和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている（第2図）。また、北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。

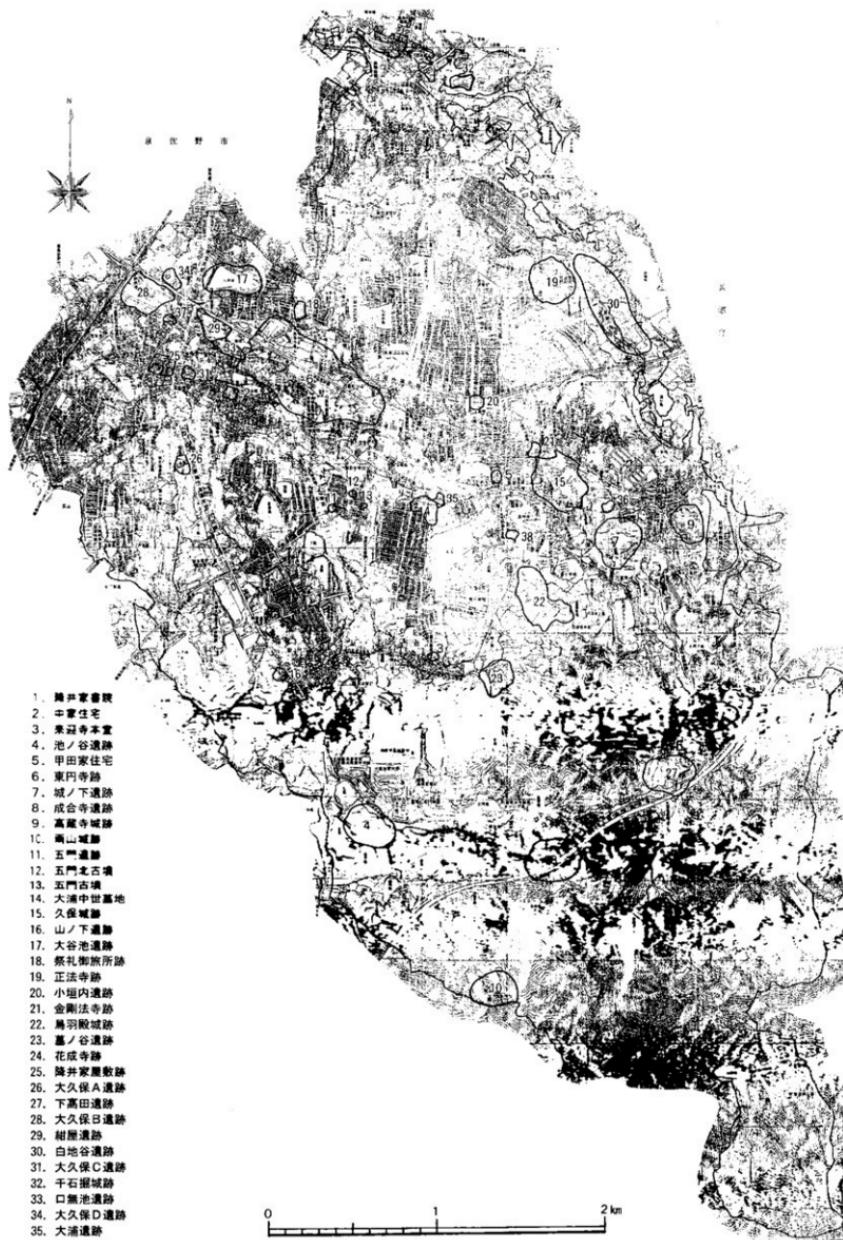
町域に水源をもつ河川は大別して見出川・雨山川・大井出川の3水系が存在している。3河川とも町南部の山間部を水源として南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を流下して大阪湾に注ぎ込んでいる。いずれの河川も下流部分が他市域を流れることに加えて、本町域が瀬戸内式気候区の東端に位置しているため年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑施設が存在している。特に現在においても町内随所で灌漑用の溜め池を日にすることができる。

第2節 歴史的環境

本町内の遺跡数は現在38ヶ所を数えるが、遺跡の範囲・性格等の不明確なものが未だに多く存在しているのが現状である（第2図）。

旧石器・繩文時代については、従来より池ノ谷遺跡（4）が旧石器時代の遺物散布地とされているが詳細は不明である。成合寺遺跡（8）からは繩文時代の石鏃・スクレイバー等の石器類が出土している。また、平成5年度の東円寺跡（6）の調査で、繩文時代早期の有舌尖頭器や前期頃の石匙・石鏃が出土しており、近辺に繩文集落の存在を窺わせるものとして注目される。

弥生時代では大久保B遺跡（28）・大久保E遺跡（37）が知られている。住吉川流域の低位段丘上に立地する両遺跡は弥生時代後期から終末期頃を継続時期とする遺跡である。大久保E遺跡の調査で、終末期頃に比定される遺物が大量に投棄された溝が検出されており、今後の周辺地域の調査で当該期の集落が発見される可能性が非常に高いとい



える。他に同時代のものとしては、前述した成合寺遺跡・東円寺跡から石器が出土している。

古墳時代については五門北古墳（12）・五門古墳（13）が古墳であったとされるが現在は消失しており詳細は不明である。他に同時代の遺構等は発見されておらず、本町においては不明瞭な時代である。

奈良・平安時代については、東円寺跡（6）から8世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また、平安時代末頃には同遺跡の遺跡名でもある「東円寺」が建立されたことが出土瓦より推測されている。

中世では、前述した東円寺跡から13世紀代の掘立柱建物が現在までに10棟以上検出されており、奈良時代以降中世に至るまでこの付近一帯に村落・社寺が形成されていたことを窺い知ることができる。成合寺遺跡（8）は14世紀代を中心とする中世墓地遺跡であり、600基あまりの土壙墓群や掘立柱建物が検出されている。大浦中世墓地（14）も同じく13世紀から15世紀にかけての中世墓地遺跡であり、近年の発掘調査において当町の在銘五輪塔の中で最も古い享徳4年（1455年）銘の入った五輪塔の地輪が出土している。中世城郭については山城・平城を含めて現在6カ所の推定地を挙げているが詳細は不明である。また、5カ所ある中世寺院跡推定地についてもほとんど未調査であり今後の調査に期待がもたれる。建造物では鎌倉時代に建立されたと考えられる重要文化財の来迎寺本堂（3）が当町最古の建造物である。

近世については、重要文化財の降井家書院（1）・中家住宅（2）といった建造物や中家文書等の中近世史料の調査が早くから進められており、近世熊取の様相が多岐にわたり研究・解明されてきている。埋蔵文化財の側では、降井家屋敷跡（25）の調査で旧米の屋敷地を区画していたと推定される溝を検出している。

（阿部）

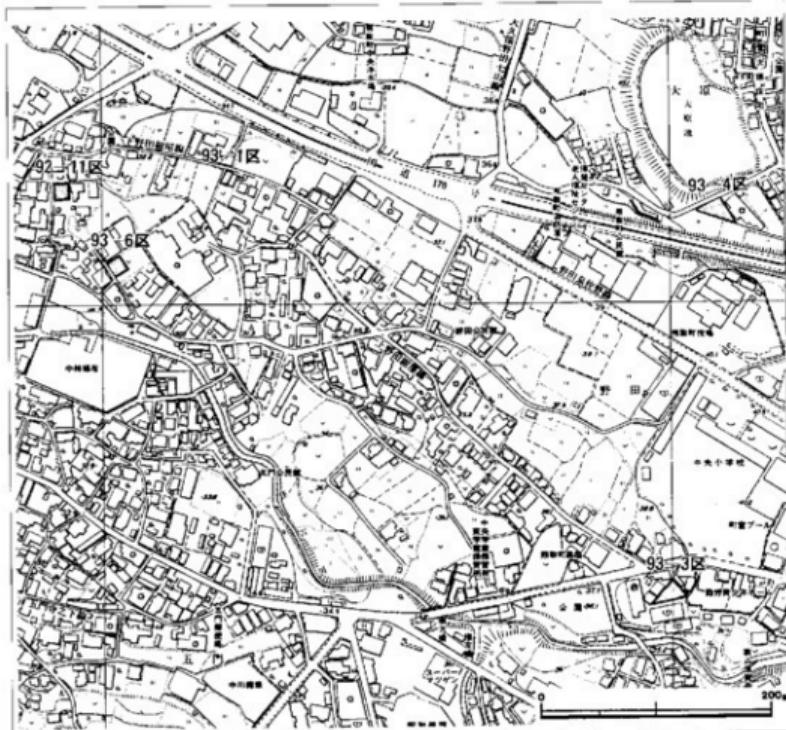
参 考 文 献

- ・ 勧大阪文化財センター『成合寺』(1985.3)
- ・ 熊取町教育委員会 『熊取の歴史』(1986.11)
- ・ " 『熊取町埋蔵文化財調査報告』

第1集(1986.3)～第20集(1993.3)

第3章 調査の概要

第1節 東円寺跡の調査



第3図 東円寺跡調査区位置図

東円寺跡は熊取町の北東部、熊取町大字野田および紺屋に所在し、熊取町役場・公民館の前面域を中心とする付近一帯に広がる寺院・集落遺跡である（第2図）。現在のところ東西約900m・南北約400mの町内最大の遺跡指定範囲を有する。地形的には現在の大井出川（住吉川）の右岸域に形成された低位段丘上に立地している。この段丘面は熊取町役場前面（「東円寺」推定地）付近が最も高く、北および西・南各方位に向かって緩やかな傾斜をもつ段丘面を形成している。

遺跡名となっている「東円寺」（廃寺）は、近辺の発掘調査により出土した軒丸・軒平

瓦や文献等から平安時代末頃に建立された寺院であると推定されている。当寺院は、付近の水田に伝えられている「トヨジ」「東永寺」「大門」「堂ノ後」等の小字名から、段丘面の高位置にあたる現在の熊取町役場の正面域に所在していたと考えられているが、中心部の発掘調査が行われていないため伽藍配置等の正確な把握は未だなされていない。

しかしながら近年の度重なる発掘調査により、寺院跡としての当遺跡の様相よりも寺院建立以前におけるこの地の様相や、建立以後に寺院周辺に成立した13世紀から14世紀にかけての中世村落の様相が徐々にではあるが明らかになりつつある。

現在のところ当遺跡において人間の営みを知ることのできる最古の時代としては縄文時代早期にまで遡ることができる。平成5年度に行った熊取町立中央小学校内の発掘調査において、縄文時代早期の有舌尖頭器や前期の石匙・石鐵等が出土しており、このことは、当時この付近一帯が縄文人の狩場として存在した可能性を示唆している。

当地周辺において確実な生活関連の遺構が検出されるようになるのは奈良時代（8世紀）以降である。「東円寺」推定地の西側近接地の発掘調査において、8世紀代に比定される遺物や掘立柱建物群が検出されている。⁽¹⁾また、東円寺跡でいうところの中世包含層内には広く奈良期の遺物が混入することからみて、少なくとも奈良時代には同地周辺の段丘上位面における土地利用・開発が進み始めていたことを裏付けている。

中世（主に13世紀～14世紀）になると寺院推定地を中心として遺構・遺物の検出量が飛躍的に多くなり、段丘面上の利用・開発が広範囲に行われたことを知ることができる。とりわけ寺院西側及び東南側段丘面付近一帯の開発が著しく、既往の発掘調査において計10棟以上の掘立柱建物を検出している。特に、1988年度に行った遺跡東端付近の発掘調査において同時期の鍛冶に関連する遺構を検出しており、⁽²⁾遺跡の東方への広がりを示唆している。また、平成5年度の中央小学校発掘調査では自然地形を利用した中世水田跡が検出されており、当時「東円寺」の東側において水田耕作がなされていたことが判明している。

近世における当地周辺は「東円寺」の衰退とともに一律に整地を受け水田化されたことが既往の調査からある程度判明している。「東円寺」の衰退については秀吉の根来寺遠征の際に焼失し衰退したと言い伝えられているが、その是非についての物証的裏付けは現在のところなされてはいない。

（阿部）

1. 92-11区の調査

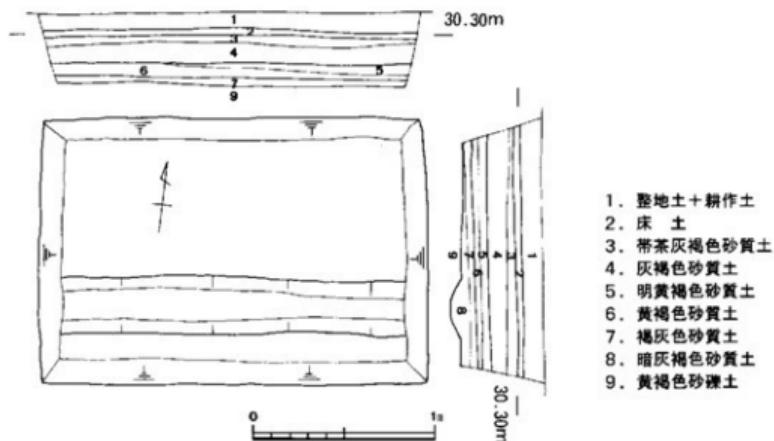
本調査地は口無池の南方約100mに位置しており、東円寺跡の西端部にある（第3図）。すぐ西側一帯には中近世の遺跡である口無池遺跡が広がっている。申請地番は熊取町大字五門1042-4番地、申請面積は226.80m²であり、現況は宅地である。

調査は個人住宅の建て替え工事に伴うものであり、既存建造物の撤去後、工事に先だって調査地中央東寄りに1ヶ所（調査区1、2×1.5m）、道路側に1ヶ所（調査区2、1.5×1m）の計2ヶ所の調査区を設定し、人力による調査を実施した（第4図）。調査期間は平成5年3月23日から25日までの3日間である。

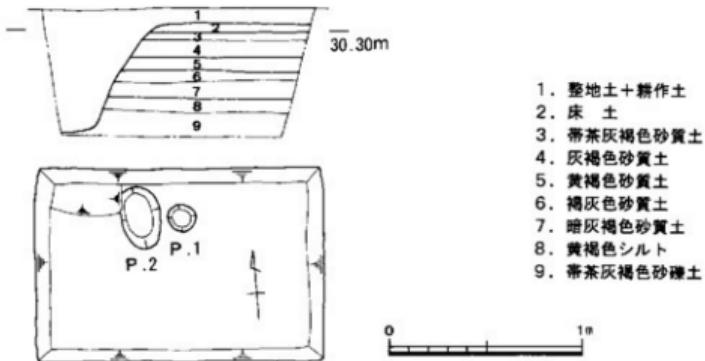
基本層序は、調査区1では整地土・床土・帶茶灰褐色砂質土（第1～3層）の下に近世遺物を含む厚さ約10cmの灰褐色砂質土（第4層）が水平に堆積をしている。その下方約10cmに中世層と考えられる褐灰色砂質土（第7層）・暗灰褐色砂質土（第8層）が堆



第4図 東円寺跡92-11区
調査区設定図



第5図 東円寺跡92-11区 調査区1 平面、断面図



第6図 東円寺跡92-11区 調査区2 平面、断面図

積する。中世の地山土は黄褐色砂礫土（第9層）である。調査区2においてもほぼ同じ層序を示している（第6図）。ただし、地山土は黄褐色シルト（第8層）となる。

遺構面としては両調査区ともに近世面・中世面の2面が存在していた。

調査区1においては、中世面より1条の溝を検出している（第5図）。中世面は調査区北側から南側に向かってやや下がる傾斜を有しており、溝は調査区の南半部において検出された。検出された溝はほぼ東西軸線上に方位を有しており、溝幅は約30cm、深さ10cm弱を計る。溝断面は緩やかな丸底を呈している。溝内埋土は第8層と同じく暗灰褐色砂質土である。埋土から遺物は出土していないため時期は不明であるが、埋土自体は東円寺跡内で検出されるいわゆる中世包含層と呼ばれる層と酷似していることから、中世のある時期に構築された溝であることには間違いないものである。調査区1の近世面からは遺構は検出されなかった。出土遺物については、近世上師器片が数点整地土中より出土している。

調査区2においては、近世面より2個のピットを検出している（第6図）。調査区の北端中央部で検出したピットで、ピット1は直径15cm、深さ15cmの円形、ピット2は長軸30cm、深さ15cmの長楕円形を呈する。埋土は近世遺物包含層の第4層と同じく灰褐色砂質土である。ピット2の埋土中より上師器片が1片出土している。調査区2の中世面からは遺構は検出されなかった。

（阿部）

2. 93-1区の調査

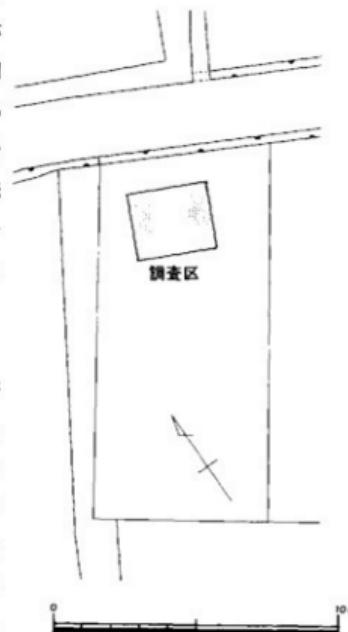
本調査地は92-11区の東方約150mの地点、また、92-6区の北西約80mの地点に位置し、東円寺跡の西寄りにあたる（第3図）。地形的には、当地周辺は高位にあたる東北側の段丘面から、低位にあたる住吉川の流下する北西方向に向かって傾斜をもつ低位段丘面を有効に利用して近世の水田開発がなされている。申請地番は熊取町大字紺屋255-1番地、申請面積は66.24m²であり、現況は宅地となっている。

調査は個人住宅の新築工事に伴うものであり、工事に先だって調査区（約3×2m）を道路側寄りに設定し、人力による調査を実施した（第7図）。

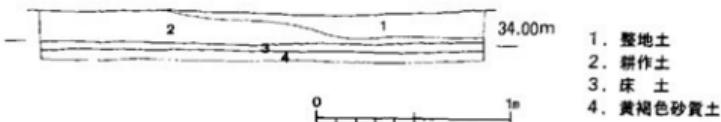
基本層序は、整地土の下に近世以降の耕作土（第2層）・床土（第3層）が削平を受けないまま存在する。しかしながら、床土の下はすぐに無遺物層である黄褐色砂質土（第4層）となり、包含層その他は近世における水田開発時点で既に削平を受け存在しないことが判明した（第8図）。

遺構・遺物等は検出されなかった。

（阿部）



第7図 東円寺跡93-1区
調査区位置図



第8図 東円寺跡93-1区 東壁断面図

3. 93-3区の調査

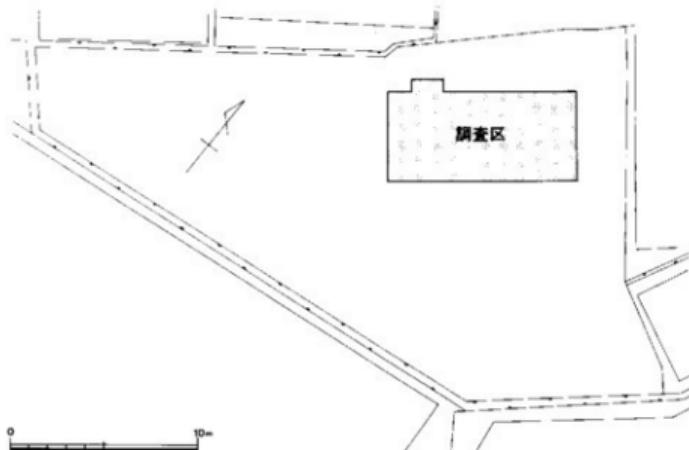
本調査地は国道170号を挟んで熊取町立中央小学校の反対側、熊取町立勤労青少年ホークの西方100mの地点に位置している。地形的には、30m南に大井出川が流下する低位段丘上に位置する（第3図）。申請地番は熊取町大字野田2196-1・2199・2199-2番地、申請面積は580.91m²であり、現況は畠地である。

発掘調査は個人住宅の新築工事に伴うものである。立地的には「東円寺」推定城の南方約100mの地点に位置し、付近一帯には「東円寺」に関連する小字名が残っている。当地点においても「八ツ地蔵」という小字名が残っており、このことから特に「東円寺」に関連する考古学的成果が期待された。

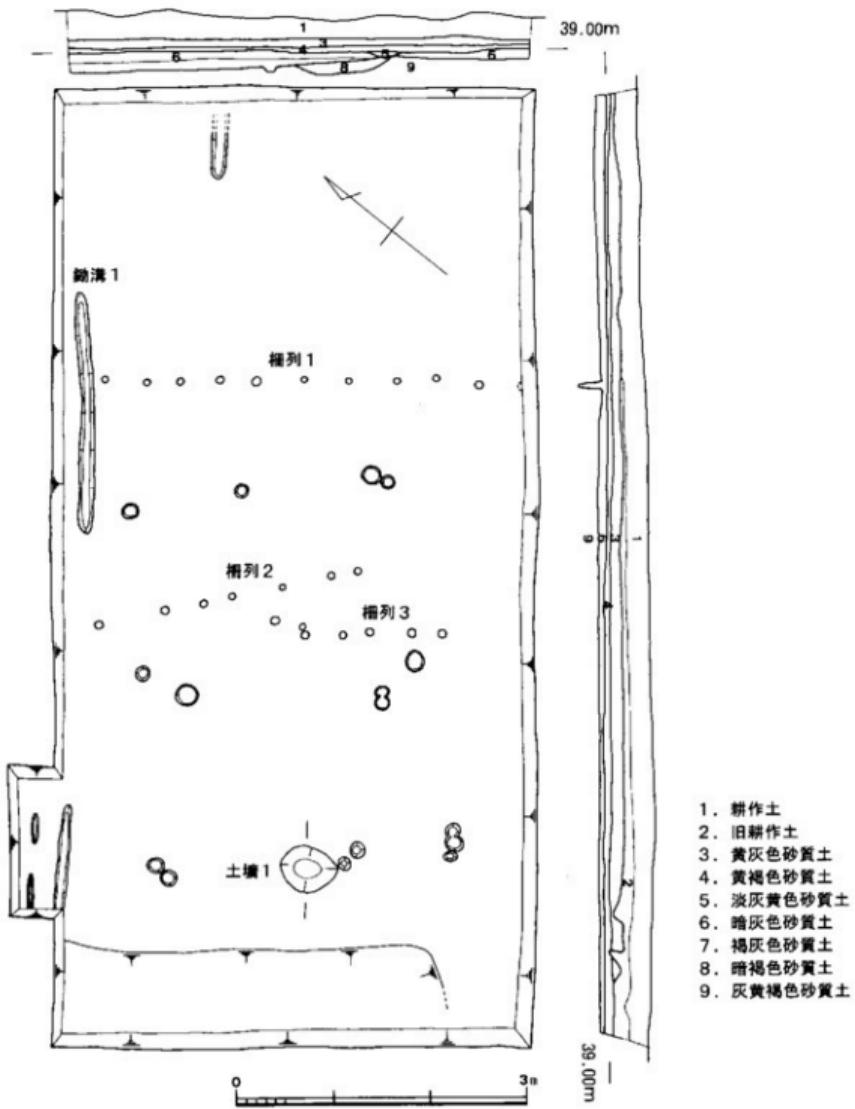
当初、5×5mの調査区を設定し発掘調査を開始したが、調査が進むにつれて遺物・遺構の検出をみたため、調査区を南西方向に5m拡張し、結果、5×10mの調査区を設定し調査することとなった（第9図）。

基本層序（第10図）

平均約20cmの厚みの現耕作土（第1層）の下には、西南方向に向かって徐々に厚みを増すⅢ耕作土（第2層）が存在する。いわゆる床土は存在せず、すぐ下は厚さ10cm程度の床土がわりの黄灰色砂質土（第3層）となる。中世包含層である黄褐色砂質土（第4



第9図 東円寺跡93-3区 調査区設定図



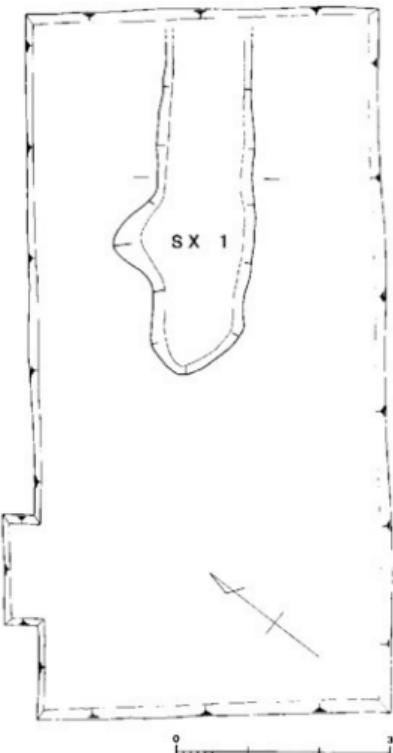
第10図 東円寺跡93-3区 第1遺構面・断面図

層)・暗灰色砂質土(第6層)が10~15cmの厚さで存在し、地山土である灰黃褐色砂質土(第9層)に至る。ただし、地山面は中央部より北西側に向かって緩やかな傾斜を有しており、そのため北西半部分については地山面と暗灰色砂質土の間に、縄文時代の石器や奈良時代~中世の遺物を含む褐灰色砂質土(第7層)が存在する。この褐灰色砂質土の厚さは調査区北西壁面で約10cm程度となっている。

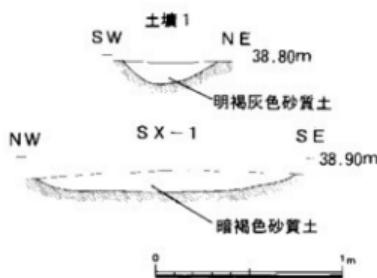
遺構(第10・11図)

調査区南西端については一段低い近世水田面を構築するため削平を受けていたが、それ以外からは中世期と考えられる柵列や柱穴、鍛溝等と、時期不明の不定形落ち込みを検出している。

柵列は計3列検出している。柵列1は調査区中央よりやや北東部で検出された柵列で、調査区の短辺に平行するように南東から北西方向に向かって延びている。杭跡は直徑5~8cm、深さ約20cmを計るものであり、それらが30cm前後の等間隔に一列に並んで検出された。杭跡埋上は暗灰色砂質土である。柵列2・3はともに調査区中央部で検出されたものである。柵列3は柵列1に平行するのに対して柵列2だけはやや方位を異にする。杭間幅、杭跡径、埋上とともに柵列1と同じである。3柵列ともに遺物は出土していないが、埋土からして近世から中世期の間の所産のものと考えられる。



第11図 東円寺跡93-3区 第2遺構面



第12図 東円寺跡93-3区 遺構断面図

柱穴は調査区西南側で検出されている。直径15~20cm、深さ5~10cmと、いずれも小さく浅いものである。埋土は褐灰色砂質土である。調査区が狭いため全様は不明であるが、現状で2間×2間の掘立柱小建物の復元ができそうである。遺物は出土していない。

鋤溝は調査区西南端部で調査区長辺に平行して検出されている。鋤溝1は長さ2.5m、幅15cm、深さ3cmを計る。埋土は褐灰色砂質土であり、鋤溝部底部より刀子1点と土師器・黒色土器片が出土している。

土壌1は、調査区南西隅で検出された南東一北西方向に長軸をもつ橢円形の土壌である。長径60cm、短径50cmを計り、掘り鉢状に落ち込む。埋土は明褐灰色砂質土である(第12図)。遺物は出土していない。

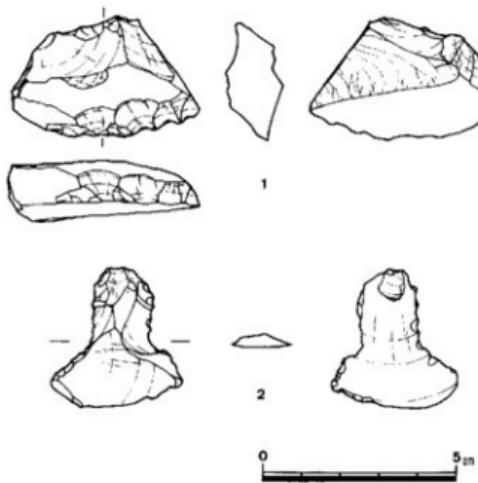
また、中世遺構面と面を同じくして、不定形な落ち込み(SX-1)を検出している(第11図)。調査区の北東部で検出されたもので、長辺5m以上、短辺1.4mを計る。断面は緩やかな落ち込みを示す。埋土は暗褐色砂質土である(第12図)が、遺物を含まないため時期は不明である。

出土遺物(第13・14図)

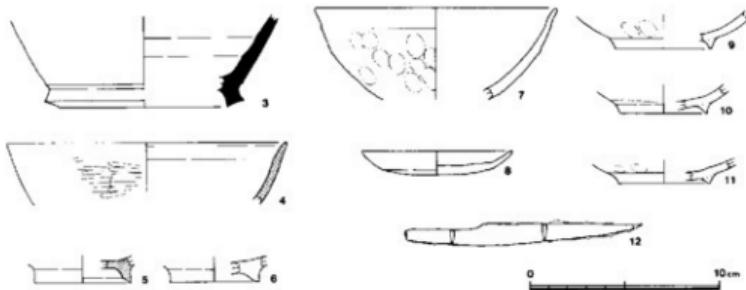
包含層より石器、須恵器、黒色土器、瓦器、土師器等が出土し、鋤溝1より刀子が1点出土している。石器、須恵器、黒色土器は褐灰色砂質土層から出土し、中世の遺物は

褐灰色砂質土層を含めた中世包含層から出土している。遺物はその殆どが細片であり、図示されるものが非常に少なかった。

石器は未製品を含めて2点出土している。1はサヌカイト製の片刃のスクレイパーである。弧状の刃を有しており、刃部の長さは4.6cmを計る。2は石器の未製品と考えられる。逆T字形をしており、両側面には剥離調整がみうけられるものの完全に調整し終えていない。裏面には打瘤裂痕が残る。1・2ともに



第13図 東円寺跡93-3区 出土遺物1



第14図 東円寺跡93-3区 出土遺物2

縄文時代のものと考えられる。

須恵器は8世紀代のものが細片で10数片出土しており、殆どが壺または壺の破片である。3は長頸壺もしくは短頸広口壺の底部片であり、復元底部径は約10.5cmとなる。

4・5はともに黒色土器の椀である。4は復元口径15cmを計る。外面には丁寧な磨き調整が施されており、口縁端部内外面には横ナデ調整を施す。5は椀の底部であり、復元高台径は5.2cmとなる。

瓦器は出土遺物の全体の約3割を占める。実測したものの(6・7・9・10・11)はすべて椀である。6は椀の底部であり、復元高台径は4.8cmとなる。黒色土器椀の底部5に酷似するしっかりとした高台を有しており、最初期段階の瓦器椀である。褐灰色砂質土層からの出土である。7は復元口径12.8cmを計る。器高は5.5cm程度になるものと考えられる。口縁部外面に強い横ナデを施す和泉型と呼称される瓦器椀である。9～11は椀の底部である。3個体とも高台としての機能を持ちえるだけの断面三角形の貼り付け高台を有している。9のみ底部内面に斜格子の暗文がかろうじて観察された。

土師器については奈良時代から中世までのものが出土している。出土量が全体の5割以上と最も多いがその殆どは13世紀代の小皿・羽釜等を含めた細片である。8は復元口径8cm、器高1.3cmを計る小皿であり、内外面ともにナデ調整を施す。

12は鉄製の刀子である。やや反りをもつ細身の刀子であり、全長12.7cm、刃渡り8.5cm、刀身最大幅1.1cmを計る。黒色土器・土師器片とともに動溝1の底部から出土したものである。

(阿部)

4. 93-4区の調査

本調査地は、大原池の南堤裾部に位置しており、東円寺跡の北端部にあたる（第3図）。

申請地番は熊取町大字紺屋231-1番地、申請面積は282.36m²であり、現況は宅地である。

調査は個人住宅の建て替え工事に伴うものであり、既存建築物の撤去後、工事に先だって道路側の便橋予定地に調査区1、および南隅に調査区2を設定し、人力による調査を実施した（第15図）。

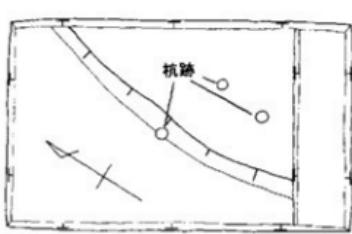
調査区1の基本層序は、遺存する耕作土の下に旧耕作土・床上と続き、無遺物層である帶黃灰色砂質土となる。遺物・遺構等は検出されなかった。

調査区2の基本層序は、西半部については耕作土の下に、耕地化の際のものと思われる整地上（第2・3・4層）が存在する（第16図）。地山上である明黄色砂質土（第5層）は南北方向を軸にして、調査区を斜めに二分するように西侧方向に向かって浅い傾斜をみせる。また、調査区中央付近において木杭跡を3個検出したが、近世以降の耕作作業時の所産のものであると考えられる。遺物は検出されなかった。

両調査区共に現状地盤より数十cm掘り下げただけでかなりの湧水がみうけられた。特に調査区1の湧水が多く、これらについては本調査地が大原池の南堤裾部に隣接していることに起因するものと思われる。（阿部）



第15図 東円寺跡93-4区 調査区設定図



第16図 東円寺跡93-4区 調査区2 平面・西壁断面図

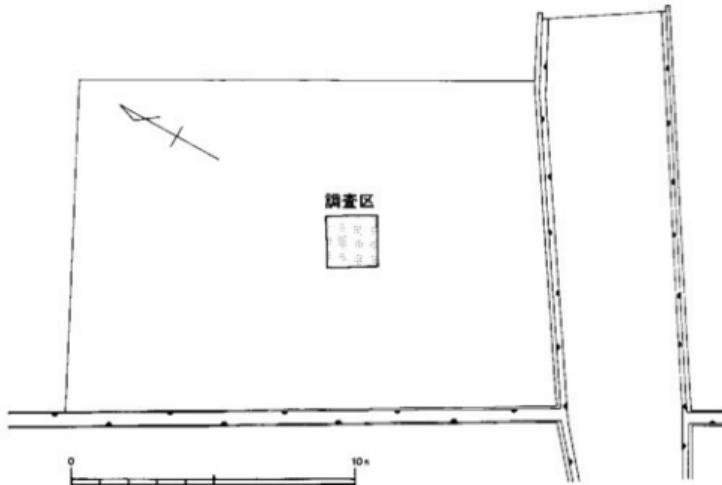
5. 93-6区の調査

本調査地は東円寺跡内では西寄りにあって、住吉川中流右岸の河岸段丘上に位置していると思われ、南に向かっては下りの傾斜地形をみせる（第3図）。住吉川を挟んだ向かいに重要文化財中家住宅がある。

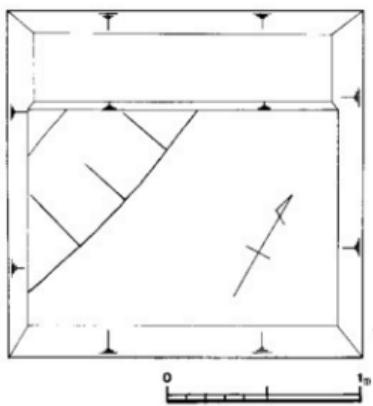
申請地番は熊取町大字紺屋263-1番地であり、申請面積は198.31m²、現況は雑種地であるが元来は田地であったようである。

平成5年8月31～9月2日、個人住宅の新築工事に先立って、便槽設置予定位置に調査区を設定して人力掘削による調査を実施した（第17図）。

層序を上からみると、耕作土（第1層）と床土（第2層）、その下に整地層が3層（第3・4・5層）、さらに自然堆積の薄い砂層（第6層）があって、以下には年代不詳の浅黄色と黄褐色の砂質土層が2層ある（第7・8層）が、これには遺物等は一切含まれておらず自然堆積との識別は困難な層ではある（第19図）。このうち下側の黄褐色砂質土（第8層）はさらにその下にあった溝状の落込みとその埋土の上面を削平しているような堆積をみせているので整地層と思われる。調査区内最下部には灰黄色粘質土とその上に砂礫土が堆積している状況で、これを地山としたが、この地山面には深さ60cm程度の落込みがみられ（第18図）、埋土は黒褐色砂質土（第9層）と暗灰黄色で礫を含む砂質



第17図 東円寺跡93-6区 調査区設定図



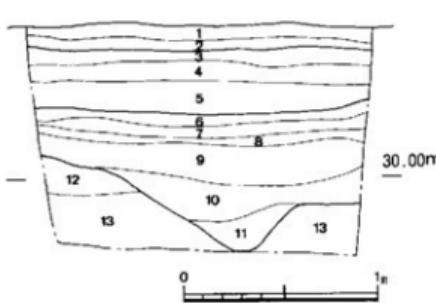
第18図 東円寺跡93-6区 平面図



第20図 東円寺跡93-6区 出土遺物
土（第10・11層）からなっている。この
中からはその時代や性格を推察できるよ
うな遺物は検出されなかったが、埋上の
特徴から弥生～古墳期の可能性がある。

出土遺物は中世の土師器・瓦器・須恵
質土器であり、いずれもⅢ耕作土層から
検出され、遺構に伴うものではないが、
付近に中世の遺構があった可能性を示し
ている。

（前川）



- | |
|--------------------------|
| 1. 耕作土 |
| 2. 床 土 |
| 3. 10Y R5/2 灰黃褐色砂質土 |
| 4. 10Y R5/4 にぶい黄褐色砂質土 |
| 5. 10Y R6/2 灰黃褐色砂質土 |
| 6. 2.5Y 6/4 にぶい黄色砂 |
| 7. 2.5Y 7/3 淡黄色砂質土 |
| 8. 2.5Y 5/3 黄褐色砂質土 |
| 9. 2.5Y 3/2 黑褐色砂質土 |
| 10. 2.5Y 4/2 暗灰黃色砂質土疊混じり |
| 11. 2.5Y 5/2 暗灰黃色砂質土疊混じり |
| 12. 2.5Y 6/4 にぶい黄色砂疊土 |
| 13. 2.5Y 6/2 灰黃色砂質土：地山 |

第19図 東円寺跡93-6区 西壁断面図

第2節 大浦中世墓地の調査

大浦中世墓地は熊取町のほぼ中央部、熊取町大字小垣内に所在し、現在の大宮地区の墓地の北側に隣接して位置する、中世から近世に至る共同墓地跡である（第3図）。地理的には南側に位置する大池と大井出川に挟まれた丘陵斜面上に立地する。南西側一帯にはやはり中近世期の遺跡である大浦遺跡が隣接して位置する。

同遺跡はその名の示すとおり中世の共同墓地跡である。1990年度の発掘調査の際には、方形土壙群や溝・柱穴等を検出している。土壙には河原石が敷き詰められ、五輪塔が倒壊もしくは廃棄された状態で検出されており、この地がまさしく墓地であったことを表わしていた。出土した五輪塔は15世紀代を中心とする中世期の形態をとどめるものであり、享徳四年（1455）という記年銘の入った地輪も1点出土している。出土遺物については15世紀を中心に13世紀から15世紀までのものが出土しており⁽³⁾、椀・皿・羽釜等の日用雑器類以外に、火鉢・火鉢・灯明皿といった葬送儀礼に用いられたと思われる遺物が出土している。又、同時期の瓦も大量に出土しており、当地に小堂のあったことが窺われる。

（阿部）



第21図 大浦中世墓地 調査区位置図

93-1区の調査

本調査地は半径100m程の小さな大浦中世墓地内で、北端付近に位置し、調査地点の北側は下り傾斜となって大井出川があり、すぐ南の傾斜上には大宮地区の墓地が存在する(第21図)。申請地番は熊取町大字久保4220-2番地、小垣内1564-3番地、申請面積は173.32m²、現況は宅地である。

本調査地点と大井出川との間には大浦遺跡が隣接しており、今回の調査地点とは反対方向の町道五門久保小谷線に接するその最も北側の部分の調査では、標高48.50m以下に中世の包含層が認められ、瓦器・上部器片等が出土している。

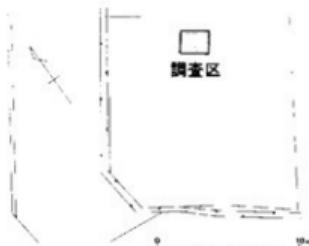
平成5年8月20・21日、個人住宅の新築工事に先立って、便槽予定部分に調査区を設定し、人力掘削による調査を行った(第22図)。

調査区の北半分は、隣接する大浦遺跡93-1区内の南側部分での調査結果と同様、以前の開発行為による著しい搅乱および盛土が行われていたことがわかり、南側半分にのみ砂層の分厚い堆積が残っていた状況であった。

その基本層序を述べると、地表面より-0.6m(標高49.70m)までは近年の開発によって整地盛土が行われた状況が窺われ(第1層)、以下、地表面-1.6m(標高48.70m)付近まで砂層の自然堆積が繰り返された層(第2~7層)を検出した(第23図)。

期待された遺物・遺構等は一切検出されなかった。

(前川)

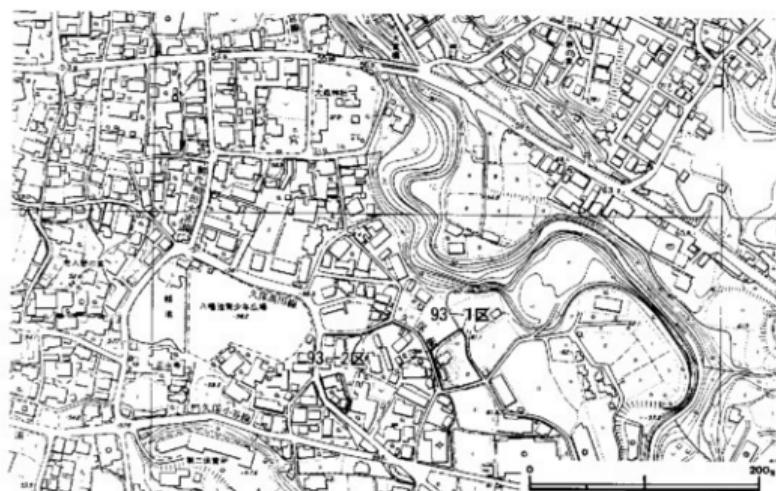


第22図 大浦中世墓地93-1区
調査区設定図



第23図 大浦中世墓地93-1区 南壁断面図

第3節 久保城跡の調査



第24図 久保城跡 調査区位置図

久保城跡は、熊取町の中央やや北東よりにあり熊取町大字久保に所在する。平安期半ばに編纂されたとされる『和泉国々内神名帳』に名の出てくる大森神社の南側一帯に広がる段丘面に位置している。現在、見出川の左岸域一帯を中心とした地域に、小字名として「矢ノ倉」「的場」「上居ノ内」「中堀」「荒堀」等の名が残っており、この地に中世城郭の存在したことを窺わせている。

考古学的には、今まで小規模な発掘調査を数ヶ所行っているだけにすぎず、城郭に直接関連する遺構等は未だ検出されていない。
(阿部)

1. 93-1区の調査

調査地点は見出川中流左岸部、大森神社の南約250mにあり、北の見出川から向かって高く、また反対の南に走る町道五門久保小谷線からも小高くなる地形を呈し、河岸段丘上に位置していることが考えられる(第24図)。

申請地番は熊取町大字久保1582-1・2番地、申請面積は950.19m²、現況は宅地である。調査は個人住宅の増築・建て替え工事に先行して、西側の便槽設置予定部分に調査区1、中央部分に調査区2を設定して人力掘削による発掘調査を行った(第25図)。

調査区 1

調査地点の西端部、道路および幅広の側溝に面している部分で、現況では道路面よりおよそ1.5mほど高まった地形の上に位置する。

基本層序は、若干の風化土の下に耕作土（第2層）と、それにかかる褐色で砂質の整地土（第3層）、以下、粘土を含む砂質土（第4層）と暗灰黄色の砂質土（第5層）があつて、ともに遺物等を全く含まず時期不明であり、最下部には分厚く砂礫を多量に含んだ粘質土（第6層）に至り地山とした（第26図）。

遺物・遺構等は一切検出されなかった。

調査区 2

調査地点のほぼ中央にあって、既存住宅の増築部分にあたる。

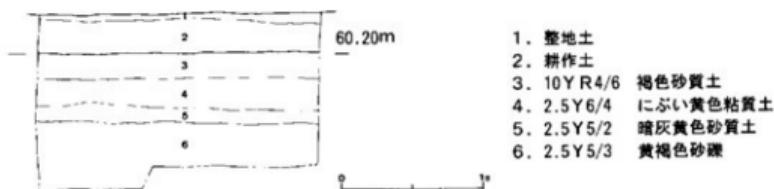
層序に関して、数cmの表土を除去して、15cm程度の旧耕作土と、それに関連する整地上の薄い堆積があり、以下の分厚いオリーブ灰色の砂層に至って地山とした。

遺物・遺構等は一切検出されなかった。

以上、両調査区の結果から、同調査地点は北側にある見出川による流上堆積が度重なって小高い高まり状の地形をみせ、ある時期にその西側部分に盛土をする工事を行って耕作地とし、やがて宅地となって現在に至ったものと思われた。 (前川)



第25図 久保城跡93-1区 調査区位置図



第26図 久保城跡93-1区 調査区1 東壁断面図

2. 93-2区の調査

調査地点は久保城跡西端部、見出川中流左岸部に位置し、周囲は東西両方に向かって緩やかに下る地形を呈するが、現況では比較的平坦な宅地が広がっている（第24図）。申請地番は熊取町大字久保1554番地、申請面積は372.74m²である。

調査は個人住宅の建て替え工事に先行して、東側の便槽予定部分を調査区1、調査地中央部分に調査区2を設定して人力掘削による調査を行った（第27図）。

調査区1

基本層序は約40cmにおよぶ近年の整地搅乱層（第1層）が比較的新しいと思われる耕作土（第2層）を削平しており、以下灰色粘質土の整地上（第3層）と、それに切られた二つめの耕作土・床土（第4・5層）、最下層には50cm以上にもおよぶと思われる分厚い粘土層（第6層）がある（第28図）。掘削するによよんで湧水が多く、最下層にみられた粘土層は調査区東側に池などの水質に富む地形があったことを示す自然堆積土と思われる。

遺物・遺構等は一切検出されなかった。

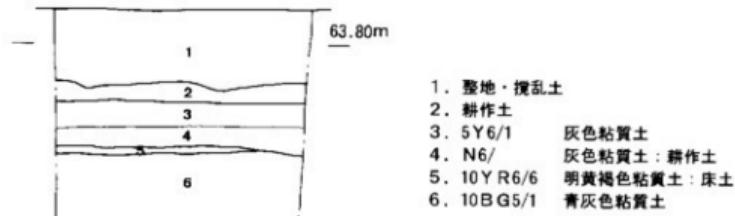
調査区2

調査区1より北西約10m付近であり、現況では調査区1との高低差は殆どない。建物

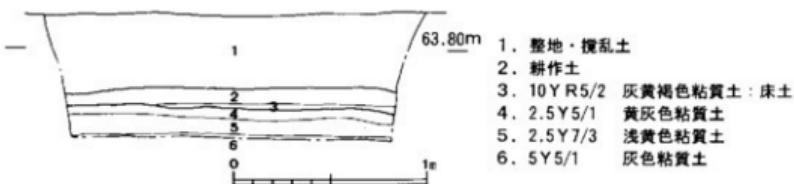


第27図 久保城跡93-2区 調査区位置図

調査区1 北壁断面図



調査区2 東壁断面図



第28図 久保城跡93-2区 調査区1・2 断面図

の基礎予定深度を考慮しながら掘削したところ、近年の整地搅乱層（第1層）、時期の新しい耕作土（第2層）と床土（第3層）、さらに合わせて20cm程度になる黄灰色と浅黄色の整地土が2層存在して、最下部にはやはり二つめの灰色の耕作土が現れ、調査区1と同様の土層断面を示した。

遺物・遺構等は検出されなかった。

今回の調査区のおよそ150m西側には八幡池が存在し、さらにその東側に隣接する八幡池青少年広場もまた以前は八幡池の半分を埋め立てたものであり、したがって調査地点はこの八幡池に接していた可能性がある。また小字名には中堀の名が残っている事実もあり、調査結果と照合して以後検討していく課題の一つとしておきたい。（前川）

第4章 おわりに

前章で述べたとおり、本書では東円寺跡・大浦中世墓地・久保城跡の3遺跡における計8件の国庫補助対象事業に伴う発掘調査結果について触れた。

東円寺跡については既存の発掘調査成果の蓄積により、寺院自体については不明瞭ながらも、付近一帯の歴史的様相が徐々に判明しだしている。今回調査した93-3区からも比較的まとまった遺物とともに遺構等も検出しており、中世集落としての遺跡の南西方向への広がりを認識させる結果となった。92-11区の調査においても東西方向に延びる溝を検出しており、こちらについては隣接する口無池遺跡・紺屋遺跡との関連を含めてとらえる必要があり、今後の調査成果の蓄積を待たねばならない。しかしながら、今年度特筆されることは、東円寺跡から有舌尖頭器の出土や石鎧・石匙等の縄文時代前期以前の遺物の出土をみたことと、今回の93-3区の調査でもやはり縄文期のスクレイバー等の石器の出土をみたことである。既往の調査でもサヌカイト片の出土がみられたのであるが、年代の特定可能な石器の出土により本遺跡が縄文時代の遺物散布地としての性格を有する遺跡であることが明確となり、今後の発掘調査方法の在り方について一考させられることとなった。

大浦中世墓地・久保城跡の調査については、調査面積が小さいことも含めて今回も目につく成果はみられなかった。今後の調査に期待したい。

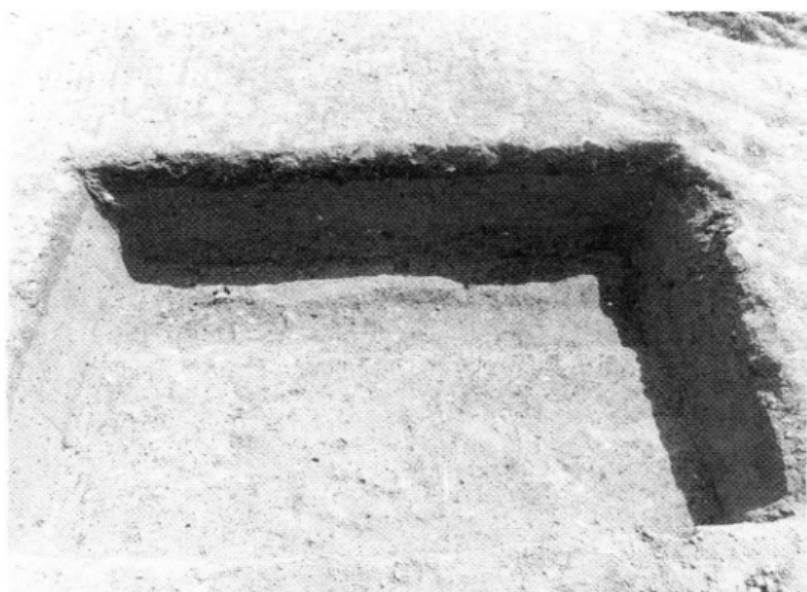
本町では、東円寺跡以外の町内の遺跡群については遺跡毎の諸様相の把握が殆どなされていないのが現状である。詳細な遺跡範囲確認調査の必要性も含めて、各遺跡の早急な把握が文化財保護の担当局としての第一の責務となっていることを挙げておきたい。

(阿部)

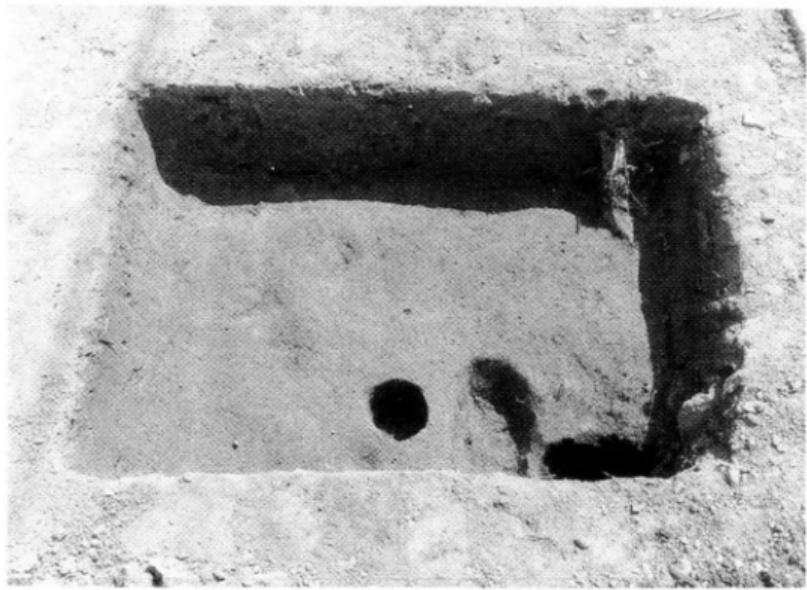
註

- (1) 熊取町教育委員会 『熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・II』(1988.3)
- (2) " 『東円寺跡発掘調査概要・III』(1989.3)
- (3) " 『熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・VI』(1992.3)

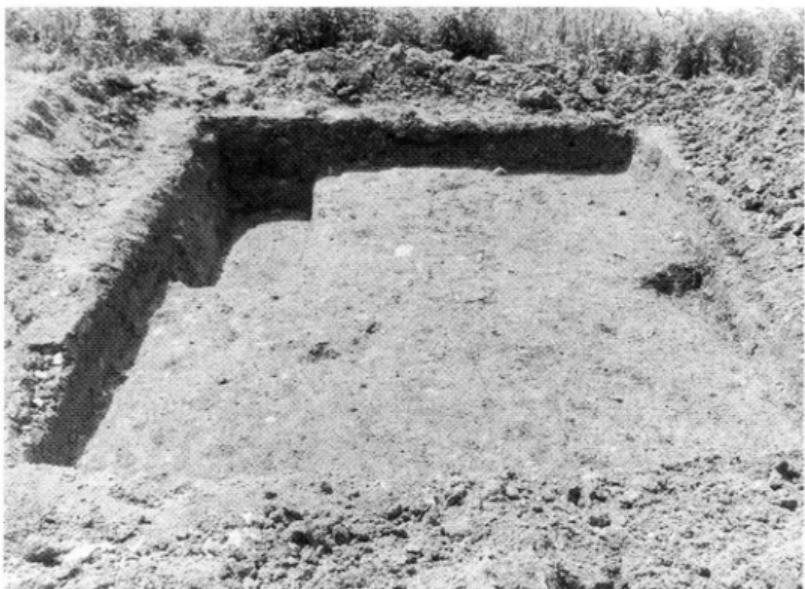
図 版



調査区1 全景（北より）



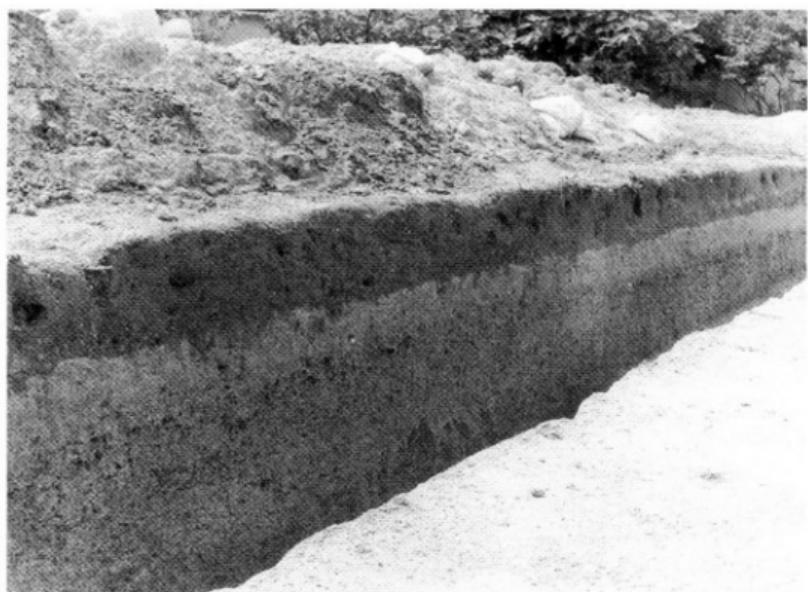
調査区2 全景（北より）



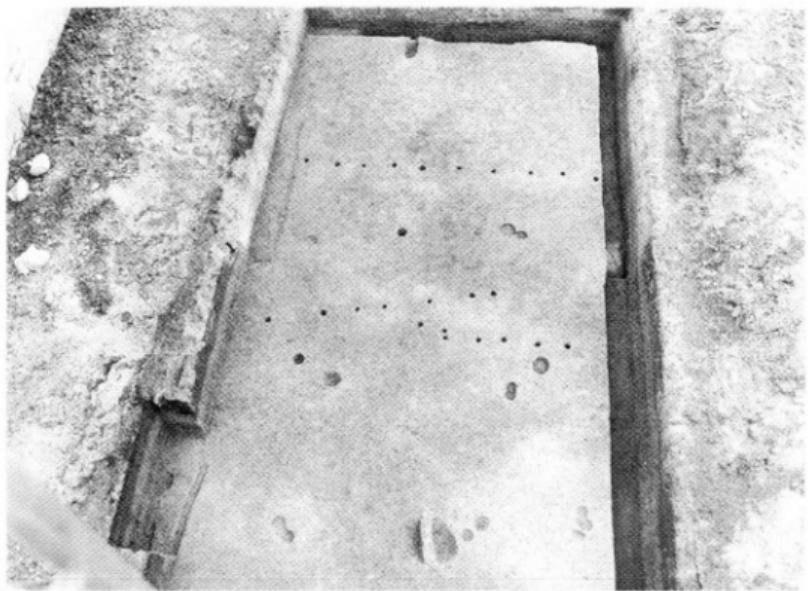
全景（東より）



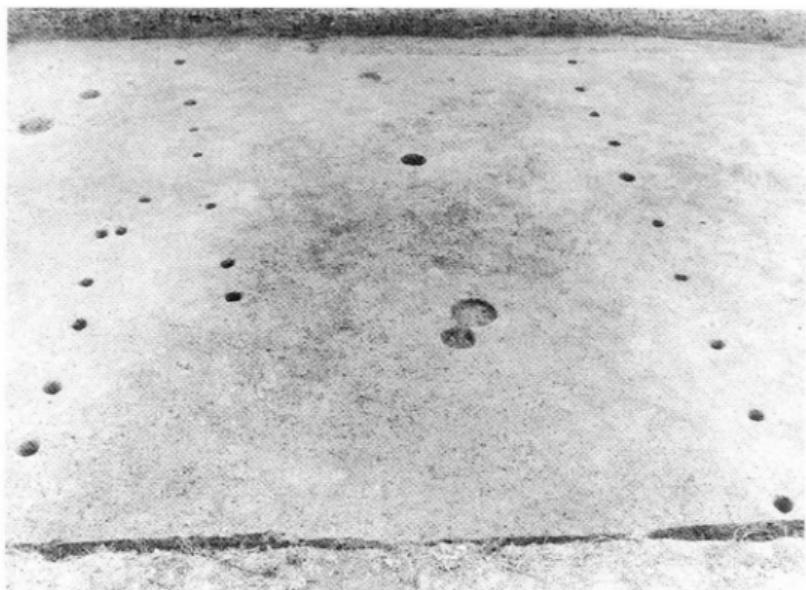
東壁



南東壁



全景（南西より）



柵列（南東より）



SX-1（北東より）

図版第五 東円寺跡 93—3区 出土遺物



5



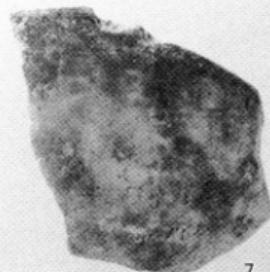
2



12



3



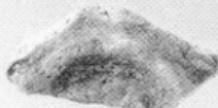
7



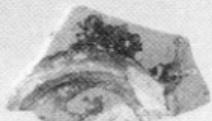
8



5



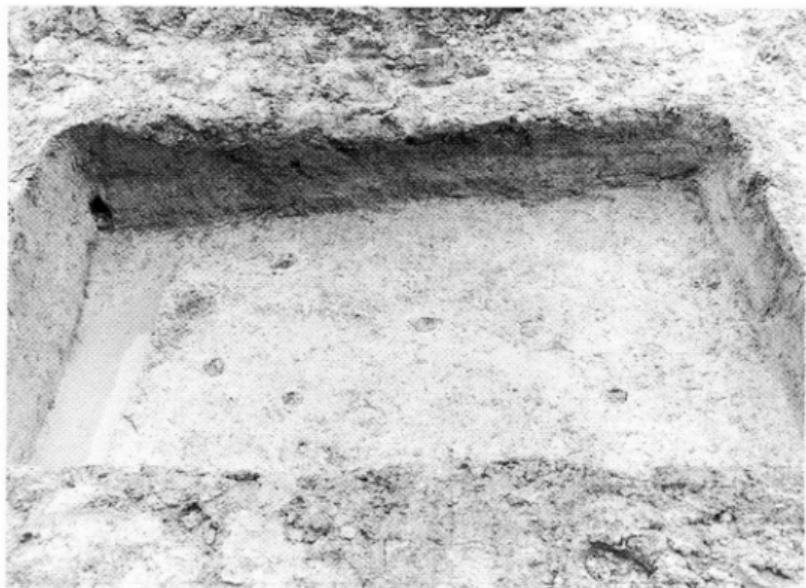
6



11



調査区1 全景（北西より）



調査区2 全景（北東より）



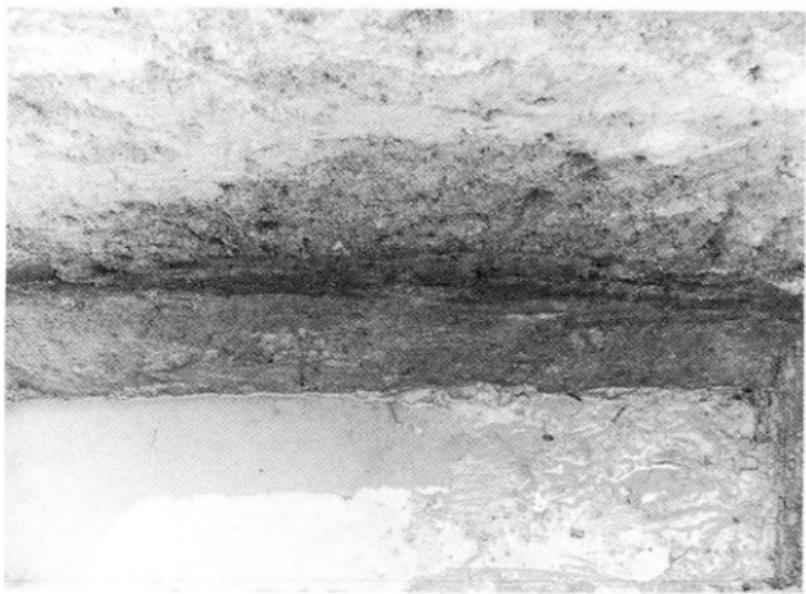
全景（西より）



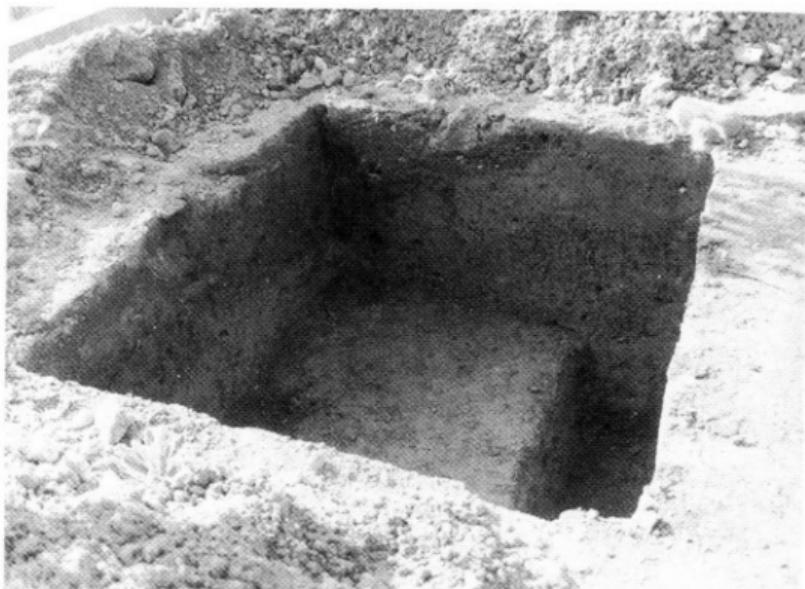
西壁



全景（南東より）



南壁



調査区1 全景（東より）



調査2 全景（南より）



調査区1 全景（南より）



調査区2 全景（南より）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	くまとりちゅうりせきぐんはくつちょうさがいようほうこくしょ						
書名	貴賀町埋蔵文化財調査報告書						
調査名	貴賀町埋蔵文化財調査報告書						
番次	2						
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第22集						
編著者名	阿部 真、前川 淳						
編集機関	熊取町教育委員会						
所在地	〒590-04 大阪府泉南郡熊取町大字野田2244 電0724-52-1001						
発行年月日	西暦 1994年 3月						
ふりがな	ふりがな	口	下	北緯	東經	調査期間	調査面積
所取遺跡	所 在 地	市町村	遺跡番号	°	'	調査期間	調査原因
東円寺跡	大阪府泉南郡 熊取町大字五門	27361	8	34°23'56"	135°21'39"	92-11区 19930323～ 19930325	4.5
	大阪府泉南郡 熊取町大字細屋			34°23'49"	135°21'15"	93-1区 19930511～ 19930512	6
	大阪府泉南郡 熊取町大字野田			34°23'44"	135°21'30"	93-3区 19930607～ 19930609	50
	大阪府泉南郡 熊取町大字細屋			34°23'55"	135°21'32"	93-4区 19930708～ 19930709	4
	大阪府泉南郡 熊取町大字細屋			34°23'54"	135°21'10"	93-6区 19930831～ 19930902	4
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
東円寺跡	集落遺跡 寺院跡	縄文時代	なし	スクレイバー、石器未製品	縄文時代から近世までの複合遺跡		
		奈良時代	なし	須恵器			
		中世	獨立柱建物 欄干 窓 その他	1棟 3列 1条 排水、土壤等			
		近世	柱穴等	土師器			

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ° °	東 緯 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大體中世墓地	大阪府泉南郡 熊取町大字久保 大字小里内	27361	14	34°23'30"	135°21'48"	93-1区 19930820～ 19930821	3.0	個人住宅建設に伴う緊急発掘調査
久保城跡	大阪府泉南郡 熊取町大字久保	27361	15	34°23'32"	135°22'10"	93-1区 19930913～ 19930917	6.3	同上
	大阪府泉南郡 熊取町大字久保			34°23'32"	135°22'15"	93-1区 19931215～ 19931216	6.3	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
大體中世墓地	墓 地 跡	なし	なし	なし		なし		
久保城跡	城 墓	なし	なし	なし		なし		

熊取町埋蔵文化財調査報告 第22集
熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・VIII

平成6年3月・発行

発行・編集 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町大字野田2244番地

印刷 小笠原印刷